ホラーティウスにおけるトロヤ戦争の英雄たち（1）

松　田　治

I　はじめに

古代ギリシアで英雄神話がその原初的な形で成立しつつあった頃，神々と人間の相違はどの程度に截然と意識されていたであろうか。ホメーロスの二作品によって，今日の読者はアキレウスやオデュッセウスを知る。ヘクトールの悲運，ヘレネーの輝きを知る。彼らは，ホメーロスによって，神々に佑けられたり指図されたりする様で描かれている通り，そもそもから人間であったのか。あるいは神々が衰えきった果ての姿であろうか。神話発生〔英雄神話に限らず，一般に）の問題はいわば神秘の凝集体であり，よって諸説の簇生を許す。冒頭の，英雄神話発生の時期にしても定説を求めがたい。かつてニルソンは，これをミュケーナイ時代のことであると主張した[1]。そして昨今，この時期をさらにミュケーナイ時代以前に遡らせようとする新たな仮説が提案されている[2]。一個の壺，あるいは壁絵や文字板の一片が，既知の歴史に新たな始源史を付加する可能性をはらむ世界である。

さてしかし，小論の目的は，かかる壮大神秘の世界に入って，神話の濫觴を云々することではない。遡って精々ホメーロスにより文字化され，固定された 2，3 の英雄たちの姿を追う程度であり，その上筆者の領域はあくまでもホラーティウスの作品でなければならない。

なぜホラーティウスでなければならないか。筆者にとってはなかなか把握しがたいこの詩人を，最も目に明らかな形象，「英雄」の姿を論じることによって，些少なりとも理解できはしまいかと考えたのである。いかにもギリシア的な ‘aurea mediocritas’[3] の一事をもって目つぶしをくわされてはならない。短簡な表現が多くを語りうる場合がある。喚起力の強いよくできた俳句がその好例であろう。しかしそうでない場合もある。往々にしてこれは受け取る側の誤解を招く。偶々そのような事例を胸に収めて納得していると，それなしに存在し続ける全体を失う恐れがある。一種の言語の陥穽であろう。筆者にとってホラーティウスはネーレウスである。哲学については一流一派にこだわらぬ柔軟さを示し，かと思えば哲学者以上の哲学者はホメーロスであると説き[4]，冒頭に春信を見る喜びを語ったかとみる間に「死神」（pallida mors）を登場させて心胆を寒からしめ[5]，田舎に行けばすぐ都を恋いしがり，都に帰れば帰ったですぐ田舎に思いを馳せ[6]，それでいて終生微塵の揺ぎも見せなかった友誼をマエケーナースとの間に結びえた詩人，他にも枚挙に暇はないが，このようなホラーティウスを筆者は把えがたいとするのである。それゆえ，見えない部分の多い神々をさし置いてまず「ホラーティウスの描く英雄たち」である。

それでは何故に「トロヤ戦争の」英雄たちでなければならないか。まず，この戦争譚が遍く人口に膾炙していることである。他の理由は次の如く述べることによって自明であろう。すなわち，神話テーマに即していえば，ホラーティ

1) Martin P. Nilsson, *The Mycenaean Origin of Greek Mythology*, 1932.
2) G. S. Kirk, *The Nature of Greek Myths*, 1974, p. 218.
3) *C.* 2・10・5.
4) *Epst.* 1・2・1-4.
5) *C.* 1・4.
6) *Epst.* 1・8・12, *S.*7・28-9.

ウスの作品には，この英雄神話と並行して論究すべき事柄が他にもある。たとえば，詩人の展開する英雄パレードに登場するヘーラクレースは，トロヤへは先駆的に関与するものの，この戦争当時の英雄たちとは異質の存在である。またトロヤ戦争とは直接関連のない他のギリシア英雄たちもいる。神々がいる。ラーオメドーンの罪[7]を語って，アポローンやポセイドーンを捨てておくことはできない。内乱を収束して国内平和を確立しつつあった現実の最大の英雄アウグストゥス（これは前27年オクターウィアーヌスに呈された名前であるが，小論では特に使い分ける必要のない限りこれを使用する）と神々との結びつきはホラーティウスにおいて顕著である。ギリシアの神々，ローマの神々という区分か考えられる。ローマの英雄たちはどうであろうか。ここでローマ固有の伝説と歴史の世界が出現する。ロームルスの兄弟殺しという罪を語る時[8]，詩人の胸中でロームルスとローマ市民はどのような形で結びついているか。また紛うかたなき史上の人物カトー・ウティケンシスを，一見相応しくない場面で登場させる[9]詩人の真意はどこにあるのか。以上の如き，神々や英雄たちについての詩人の関心事を我々自身の関心事となし，混乱を避けて段階的に論考を進め了せるならば，その時点で我々は，ホラーティウスにおける神話，伝説および宗教の世界に関する一応の概観を得ることになるであろう。トロヤ英雄考はその端緒である。

II　叙事詩的テーマの回避（recusatio）

トロヤ戦争はホメーロスの二大叙事詩によって，特に「イーリアス」によって伝えられる。これは，周知の如く，アキレウスの怒りと，戦争十年目にトロヤ城をめぐって展開される攻防戦に関する六脚韻による雄壮長大な詩篇である。ここに獅子奮迅の働きをする英雄たちや，時折彼らの営為に介入する神々の姿が語られるのであるが，この物語は文字化されたことによって後代の様々なジャンルの文学形式に多くのテーマを提供することになった。口誦によって伝えられていたこの物語がホメーロスの名のもとに文字化されたのは前8世紀中葉から後期にかけてのことであるとされるが，トロヤ戦争そのものは，前13世紀中葉かあるいは後半に生起したものらしく，アカイアのギリシア人たち——青銅器時代後期にミュケーナイ，ティーリュンス，ピュロス，コリントス，テーバイ，アテーナイなどの諸都市に住んだギリシャ人——の最後の大冒険の一つであったとされる[10]。

さて，ホメーロスの時代から約700年経過してホラーティウスは生まれた（前65年）。彼の眼前には既に動揺することを止めたギリシア神話の一大源泉があり，これをいかようにも利用することができた。しかるに彼は抒情詩人であり，戦争や武功といった荒事をそれに相応しい枠を利用して語ることを好まず，いかに慫慂されようともこれを固辞する態度をとった。彼は自分の天禀がギリシアの抒情詩形を借りて歌うことにあり，為すべきことはラテン語でギリシアの大抒情詩人らのそれに匹適するような作品を残すことにあることを確固として自覚していた。実に長いあいだ彼は叙事詩型の詩や，専ら他者をべたぼめするだけの詩に対しては麻痺を覚えてこれを嫌悪し，またどうしても宮廷詩人になりきることができない。これは彼の性格の支配的な特徴の一つであった[11]。トロヤ戦争にまつわる諸々のエピソードは従って彼の詩の主題にはなりにくいものであり，ホラーティウス研究においてもトロヤ戦争をはじめとする英雄神話の一項が独立した形で論じられることの少ないゆえんである。

さて，あるテーマの作品化を勧められてこれを拒否する *recusatio* という手法は別段ホラーティウス独自のものではないが[12]，彼の場合は

7) *C.* 3・3・21-2.
8) *Epd.* 8・19-20.
9) *C.* 1・12・33-6.
10) Kirk, *op. cit.*, p. 96.
11) J. Perret, *Horace*, p. 42.
12) R. G. M. Nisbet, M. Hubbard (*A Commentary on Horace: Odes Book I*, 1970), pp. 81-3.

これが特に目立ち，そして必然的にほとんど常に叙事テーマとの関連において現われる。まずこの問題を検討しなくてはならない。トロヤ戦争を含めて叙事詩的要素の重要性が逆説的な形で浮彫されるのである。彼がどういう風にこのテーマを回避するか，その態度に変化があるか否か，またこの *recusatio* に特別な意義があるかどうか，幾つかの例をあげて検討しよう。

あなたは，兇暴なヌマンティアの長びいた戦争や，残忍なハンニバルや，カルタゴの血で朱に染まったシキリアの海を，竪琴の柔弱な調べに調和させようと望んではなりません[13]。

また，残酷なラピテース族や，酒を飲みすぎたヒューラエウスや，ヘルクレースの手で制圧された大地（テルース）の子ら——彼らのおよぼす危険を前にして老神サートゥルヌスの輝く館は震えた——についても同様です[14]。

そしてあなたが，マエケーナースよ，散文体の歴史でカエサルの戦闘や，（かつては）強迫的だったが（今や）鎖を首に路上を曳かれゆく王たちのことを，より良く語るでしょう[15]。

しかし私はといえば，詩女神（ムーサ）は，（あなたの）奥方リキュムニア[16]の甘美な歌を，彼女の目のきららかな輝きを，そして，相互の愛にこよなく忠実な彼女の心を，私が語ることを欲したのです（Carmina 2・12・1-16）。

以下にリキュムニアなる女性の描写が最後まで続く。ここではトロヤ戦争は関係ないが，歴史や雄壮な神話が自分の語るべき事ではなく，むしろ，この詩を捧げられるマエケーナースの仕事であるとしている。マエケーナースが詩人にアウグストゥスの事績を，神話素材を織りまぜて語るように勧めたらしいことが窺われる。このような慫慂は，以下に見る如く，2，3度にとどまらなかったものと思われる。ホラーティウスの天分は，あくまでも柔和な竪琴に合う事柄——ここではマエケーナースとリキュムニアとの愛情によって一般的な恋愛テーマが個別化される——を語ることにある。自分に代る者としてマエケーナースその人を名ざしているのはいささか驚くべきことである。というのは，詩人の身近な所にウァリウス，ウェルギリウス[17]という優れた叙事詩才を有する詩人らがおり，そして彼が壮大テーマを拒絶する口実として他にもっと適切な人間がいるのだからと言う場合，普通は歴とした叙事詩人らの名をあげ，あるいは暗示するからである。詩を献ずる相手をこのように簡単に利用するのは，いかにもホラーティウスらしくない不用意なやり方である。あるいは，マエケーナースがふとしたはずみに自慢して見せたかもしれない叙事詩才を，気楽な調子でひやかしたのであろうか。いずれにしろ，この文学のアマチュアがかかる作品を書いた，あるいは書こうと試みたことは知られていない。

この引用例では甘美な歌の方がよいとして壮

13) ヌマンティア戦争は8年間続いた（前141-133）．ヌマンティアはローマに対するスペイン人の抵抗の拠点であったが，Scipio Aemilianus がこれを陥れた．

14) 第一スタンザの戦争テーマについでここは神話テーマ．ラピテース族はテッサリア山地に住む神話的一族で，王はペイリトオス．ケンタウロス族との抗争で知られる．ヒューラエウスはケンタウロスの一員．

15) 「カエサル」はアウグストゥスのこと．

16) *dominae Licymniae*，一般にマエケーナースの妻 Terentia のこととされるが，この問題については J.-M. André, *Mécène, essai de biographie spirituelle* (1967), p. 25, n. 4 を参照せよ．*dominae* は「奥方」としたが，これは Licymnia の素姓と関係する語であり，今は仮にこう訳しておく．

17) ウァリウスは叙事詩人（「死について」），悲劇詩人（「テュエステース」）．前38年ウェルギリウスと共に，ホラーティウスをマエケーナースに紹介した（*S.* 1・6・54-62）．言うまでもないがウェルギリウスは叙事詩「アエネーイス」の作者．

Eduard Fraenkel (*Horace*, 1957, p. 221) はこの詩における *recusatio* について，詩人の代役として他ならぬ言い出した本人が名ざされたとして，「ブーメラン」の如くであると適切な比喩を使っている．そして *C.* 4・2 (Pindarum quisquis studet aemulari) の場合には相手（Iullus Antonius）にピンダロス風の *epinikion* を書くよう提案できたが，マエケーナースに同様の提案をするのは皮肉になろうし，それで散文による歴史作品という観念に頼ったとする．しかしこれは不可解である．ここでは最初から歴史や神話が問題になっており，抒情詩は無関係である．確かにホラーティウスその人がアマチュアのマエケーナースにピンダロス的な *epinikion* を勧めるとすれば皮肉以外の何物でもないが，その提案の必然性がない．また，抒情詩がだめだからといって，なぜマエケーナースと歴史作品とが連絡するのか，筆者にはわからない．

大なテーマを拒絶するが，「諷刺詩集」(*S.* と略記）ではこのジャンルに関する自分の無力をその理由としてあげる件りがある。同詩集第一巻（前35年か34年に発表）の世評を気にして，どうすればよいのかと有数の老法律家トレーバティウスに尋ねる，その問答という設定である。

［Tr.］もしそれ程にものを書きたい思いがあるのなら，負け知らずのカエサル（＝アウグストゥス）の業績を敢えて語るがいい，その仕事にはたんまり褒美がもらえることも当てにできようし。

［H.］素晴しい父[18]よ，そうしたいとは思うのですが，私には力がありません。槍の立ち並ぶ戦陣や，撓んだ（槍の）穂先の下で死ぬガリア人や，落馬するパルティア兵の傷のことは，誰でもが描写できるものではありません（*S.* 2・1・10-15)。

戦闘描写は叙事詩才の見せ場の一つであり，ホメーロス以来の伝統である。同時代人としてはウェルギリウスがその力を「アエネーイス」において遺憾なく発揮した。また既にリーウィウス・アンドロニークスやエンニウスがこの分野で活躍したことは言うまでもない。しかしホラーティウスはこの詩の枠を用いることはどうしてもできない。

こういう拒絶反応は比較的初期の作品においてのみならず，マエケーナースとの交誼が断ちがたいまでに深まり，また君主アウグストゥスとの個人的交際が繁くなった後期の作品にも見られる。次にその一例をあげよう。これは，明確な年代確定はできないが，一般に恐らく前14年か13年に成ったと推測される[19]「書簡詩集」(*Epst.* と略記）第2巻第1篇（いわゆる「アウグストゥスへの書簡」の一節である。この書簡詩はアウグストゥスに請われて，詩人が大いに率直かつ巧みに書き上げた作品であり，また，詩と社会の係合いに関してホラーティウスが最も大事にした幾つかの信念を表明することを狙った個人的な詩でもある[20]。ここで詩人はこの政治家を相手にローマ文学史を語り，今日の文学状況，詩人の有しうる社会性に触れるのであるが，当面の問題にかかわる件りは全270行を数えるこの詩の最終部近くに現われる。

しかし，あなた（アウグストゥス）の好みの詩人ウェルギリウスとウァリウスは，彼らに対するあなたの判断や，彼らがあなたから賜わった贈物——これは贈る側への大いなる称賛を招きました[21]——を裏切りませんでした。そして，青銅像は，霊感に満ちた詩人の作品が名高い人物たちの性格や精神を表現するより以上の真実をもって，かかる人物たちの表情を再現する(expressi) ことはありません。そしてこの私にしましても，地を這う談論[22]を作ることを目ざさず，その代り，大いなる事績[23]を作品化し，国々や河川，山上に設けられた城砦，蛮夷の諸王国，あなたの力で(tuis que auspiciis) この地上から姿を消した戦争，平和の守り神ヤーヌスの（神殿の）閉ざされた扉[24]，あなたの支配下にパルティアを恐れさせるローマを語るかもしれません，もし私に欲するだけのことをやれる力量がありましたなら。しかしあなたの偉大さはちっぽけな詩を受けつけませんし，それに羞恥心も，私の力ではとても支えきれない事柄を試みるような向こう見ずな行為を禁じています (245-259)。

18) C. Trebatius Testa は前89年頃の生まれで，詩人（前65年）とは親子ほどの年齢の開きがある．

19) P. Grimal, *Essai sur l'Art poétique d'Horace*, 1968, p. 18.

20) C. O. Brink, *Horace on Poetry: Prolegomena to the Literary Epistles*, 1963, p. 191.

21) 引用部分の直前に語られるアレクサンドロス大王の例との対照．大王はイアソスのコイリロスという詩人の粗悪な作品が気に入って，詩人にたっぷり報賞を与えた(233-8)．これは世の笑いものになったが，アウグストゥスの場合は逆に称賛された，ということ．

22) *sermones*, くだけた調子の作品，すなわち諷刺詩，書簡詩を指す．

23) *res gestae*, 叙事詩の主題（*Ars Poetica*, 73).

24) ヤーヌスの神殿は戦時中は開かれ，平和になると閉鎖される．アウグストゥス以前に二度，彼の治世中には三度閉鎖された．

この作品がアウグストゥスの求めに答える形で書かれたことは，スエートーニウスの「ホラーティウス伝」によって知られる[25]。上記引用箇所で，ホラーティウスは自分が叙事詩を得意としないことを飽かず主張している。アウグストゥスに相応しい詩人はウェルギリウスとウァリウスであり，彼らは優れた作品を書いた。もちろん自分自身としても，この二詩人と声を合わせてアウグストゥスの業績を頌えるにやぶさかではない。いかんせん自分にはその力がない，と型通りの断りを述べている。先に引用した *S.* 2・1（30年の作と推測される）とはおよそ15，6年の開きがあるが，*recusatio* の状況に幾分の変化がある。トレバーティウスとの対話では，叙事詩テーマはあくまでもこの法律家の提案という設定であり，他の人々からの要請があったかどうか示されない。ここでは，ホラーティウスに代ってその重荷を引き受けるべき詩人の名も出てこない。他方，この *Epst.* 2・1では，アウグストゥスからこの要求がなされ，詩人も彼に直接答える。この年月が経過する間に，「ホラーティウスの叙事詩」に対する周囲の期待が集中していたことが窺われる。ウェルギリウスもウァリウスも既に世にないからである。しかしここで，かつてこの方面で功績著しかった二詩人の名を出すことは，アウグストゥスの慰めとなったであろうか。そして，相変らず叙事詩を断りつつ，叙事詩的要素で紙面を飾るホラーティウスの態度は？

時期は前後するが，抒情詩人でありながらマエケーナースから，ローマとアウグストゥスの業績を歌うよう勧められたのは，ホラーティウスだけでなく，同時期に同じマエケーナースのサロンで活躍していたプロペルティウスもその例に洩れなかった。しかし彼もこの保護者の最初の要請を斥けた。彼の「エレギー」2・1には，その弁明の辞がホラーティウスの場合に比べて遙かに微細かつ長々と述べられる[26]。恋人 Cynthia のことを歌い続けてきた詩人は，自分の軟弱な詩（mollis liber）[27]が劣っていることを認めるが，同時に，雄壮なテーマを回避する理由として，運命をあげつらい，自身の霊感の狭さを口にする。手本としたカリマコスは「狭い胸」の所有者（angusto pectore）であり，雄々しい詩は自分の力に合わないと言う[28]。J.-M. André はプロペルティウスとホラーティウスのこの態度，マエケーナースの慫慂に対するこの拒否反応を，「逃げ口上の競争を見る如し」と評している[29]。プロペルティウスは3・9においてもマエケーナースに弁明しているが，周知の如く彼はこの後援者の要請に最後まで抵抗できず，これまでの彼の詩想の源泉であった恋人への情熱の冷却も相まって，やがて期待された通りの方向を辿るに至った[30]。ついでながら，マエケーナースがプロペルティウスとホラーティウスを「保護」するその仕方には差異があった。前者に対して彼は真の保護主義を発揮し，与えられた物に匹敵する見返りを厳しく要求した。他方ホラーティウスに対しては，抵抗しがたい親しさを見せて，常に自分の身辺にい

25) ここでこの「ホラーティウス伝」の該当部分を訳しておく．
アウグストゥスはホラーティウスの作品がいたく気に入り，そしてそれが永遠に残るであろうと強く確信したので，彼は詩人に，「世紀祭歌」（Carmen Saeculare）を作ることだけでなく，彼の義理の子供たちであるティベリウスとドルーススの，ウィンデリキー族に対する勝利を歌うことも要求し，そして，このような理由で，長い空白期間の後に，カルミナ1-3巻に第4巻を付加することを強く求めた．その上，幾つかの書簡詩（sermones）を読んだ後，そこに自分のことが言及されていないので不平を言った．「私があなたに腹を立てていることを知って欲しいものだ．というのは，あなたのこの種の作品いずれを見ても，あなたは優先的に私に話をすることがないのだから．しかしもしかしたら，あなたは，後世の人々の目には，私のごく親しい友人の一人であったとされることが，あなたにとって不名誉なものと映ることを心配しているのだろうか．」かくして彼は，彼に献呈された一作品をむしり取った．それは *Cum tot sustineas et tanta negotia solus, ……si longo sermone morer tua tempora, Caesar*（*Epst.* 2・1冒頭の4行）で始まっている（Klingner の校訂による，O. Horati Flacci, *Opera*, 1959³）．

26) *Eleg.*, 2・1・1-46.

27) *Ib.*, v. 2.

28) *Ib.*, vv. 40-1.

29) J.-M. André, *Le Siècle d'Auguste* (1974), p. 189. *Mécène*, p. 134.

30) プロペルティウスとマエケーナースの応酬の経過については J.-M. André, *Mécène*, pp. 135-6 を見よ．

ることしか求めなかった[31]。

ホラーティウスは最後までこの姿勢を貫いたであろうか。

この質問に対する解答は，諾・否相半ばする。

カルミナ第4巻は詩人最晩年の作品の一つであるが，ここで彼は，同詩集1-3巻の上梓（前23年）を契機として放棄した筈の抒情詩のジャンル[32]に，長い空白期間を置いて復帰したと語る[33]。これはアウグストゥスの慫慂によるものであり[34]，各篇のテーマはもとよりまちまちではあるが，詩集成立の経緯に関して窺えるある程度の政治臭が一特徴であり，上記23年から経過した約10年の歳月が多少なりともホラーティウスの内部世界を変えていることを見ることができる。彼のカルミナを私的要素，公的要素のレヴェルで見た場合，第1-3巻ではあらゆる意味で彼の個性が発揮されているのに比べて（中には 3・1-6 の如く公的色彩の濃い作品もあるが），この第4巻は公的要素の占める割合が大きい。アウグストゥスの姿が大きく影を落としている。加えて，この頃には，従来マエケーナースの役割であった詩人たちとの接触を，彼に代って君主自らが行なっていたと言われる[35]。ここで，19年にウェルギリウスが世を去り，プロペルティウスもまた既に世にない（15年か14年に没）事実を一考するならば，ホラーティウスとアウグストゥスの交渉がいかなる性質のものであったかは推測にかたくない。「イーリアス」に勝る作品が誕生しつつあると，その「アエネーイス」が形成途中で既に世に知られ[36]，叙事詩をもって桂冠をかち得ていたウェルギリウス，一方は病の如き恋を歌っていたものの，徐々に方向転換を余儀なくされ，そして遂にローマの大を述べるに至ったプロペルティウス，この両者の他界は当時の為政者にとってかなりの痛手となったであろう。その一つの表われは，ウェルギリウスが没した時点で，若干の不完全な詩行をもつ「アエネーイス」を不満としてこれを焼き捨てるようにとの詩人の遺言をアウグストゥスが握りつぶした一事[37]をもって知ることができる。友人，先輩に先立たれ，後に残ったのはホラーティウスただ一人，若手でオウィディウスと名乗る詩人が世にもてはやされてはいたが(ホラーティウスがカルミナ1-3巻を出版した23年に活動開始)，もとよりこの青年詩人の文学は体質的に，アウグストゥスが身を挺して守り抜こうとする理念的体制とは，そして元首のこの願望によって社会に課される諸要請とは，相容れないものであった[38]。オウィディウスは後に追放の惨をなめるのである。かくしてホラーティウスは，アウグストゥスの身辺にただ一人残った，真に「アウグストゥス時代的な」詩人であった。もしアウグストゥスが彼の文学を，強権を発して政治的に利用しようと思えばできたであろう。しかし両者の間に何らかの意図で利用し，利用されるという観念を強調することは妥当であるとは思えない。たとえば R. Syme はあたかもホラーティウスが，ウェルギリウスと共に，体制べったりの姿勢を持したという風な論旨を展開したが，これには賛成しかねる[39]。既に述べたように，カルミナ第4巻の頃は，マエケーナースに代ってアウグストゥスが直接詩人らと接触した。ところが，マエケーナースの活動とは対照的に，アウグストゥスの 'mécénat' は倫理的要素が強まり，

31) J.-M. André, *Mécène*, p. 140.

32) *Epst.*, 1・1・1-12（マエケーナースに，年齢を重ねた今となっては，かつての詩作はできず，これからは哲学に専念したいと宣言する）.

33) *Intermissa, Venus, diu/rursus bella moves? parce precor, precor* (*C.* 4・1・1-2).

34) 注 25 に訳出したスエートーニウスの証言を参照.

35) J.-M. André, *Siècle*, p. 192. P. Grimal, *Horace*, 1958, p. 57.

36) *Cedite Romani scriptores, cedite Grai! nescio quid maius nascitur Iliade* (Prop., *Eleg.*, 2・34・65-6).

37) P. Grimal, *La littérature latine*, 1972², p. 74. Perret は「アエネーイス」を未完の作と呼ぶことを疑問視し，アウグストゥスの介入も 'fable' の可能性ありとする（*Virgile*, 1965, pp. 141-7).

38) J.-M. André, *Siècle*, p. 238. Hermann Fränkel, *Ovid: A Poet belween Two Worlds*, 1969³, p. 113.

39) 'Not all the poets were inclined by character or situation to such *unreserved* eulogies of the New State as were Virgil and Horace' (Ronald Syme, *The Roman Revolution*, 1939, Oxf. Pap. 1960, p. 446. イタリック筆者).

厳密な意味での政治性が減少するのである[40]。筆者は，このカルミナ第4巻に公的なもの，政治的意図にひきずられて生じた要素が皆無である，といった極論をなすものではない。しかし，その成立の経緯はともかく，この巻が抒情詩であることに変りはない。そこでアウグストゥス称賛がなされるにしても，それは抒情詩の枠を越えるものではなく，また詩人の内なる要請も考慮されるのである。カルミナは *Res Gestae Divi Augusti* たりえない。確かに彼はウェルギリウス亡きあと，いわば桂冠詩人ともいえる立場にあった。そして，かかる公的な立場にある詩人として，彼はそれに相応しい作品を残した。すなわち「世紀祭歌」(Carmen Saeculare) である。アウグストゥスはローマの平和を確立して以来，かねてローマとその神神との固い絆を誇示する絶好のチャンスとなろう世紀祭の挙行を23年に予定していたらしい[41]。しかるにその23年，ムーレーナの陰謀，希望を託していたマルケルスの死，そして彼自身の健康悪化など不都合が続発して，この祝祭は延期された。そして結局これは17年に至って漸く実現の運びとなった。ウェルギリウスは19年に世を去っていたので，ホラーティウスが祝祭歌の作詩を担当するのはむしろ当然の仕儀であった。この歌は，祝祭第3日目に27人の少年たちと同数の少女たちから成る合唱隊によって歌われた。この祝祭歌制作の経緯と，カルミナ第4巻成立のそれとを同視することは慎まねばならない。

とはいえ，既に述べた如く，アウグストゥスからの働きかけがあったことは事実である。そしてこの働きかけは，*C. S.* の作詩を依頼する時とは異なる状況でなされたであろうと想像される。思うに，この際は両者の個人的なつながりが大いに与って力があったであろう。そしてアウグストゥスは，ローマの栄光，自己の業績，子供たちの軍功を，後世に残る形で，詩に歌うよう求めた。今回はホラーティウスはこれを無下にできなかった。ともかく何らかの形を残さなくてはならない。

かつて，前25年，スペインに遠征中のアウグストゥス[42]がマエケーナースに，書簡係秘書として身辺に置いておきたいのでホラーティウスを自分の方へ来させるようにと要請し，そして当の詩人が病弱を理由にこの名誉を謝絶して以来[43]，およそ10年の歳月が流れている。詩人は今や最晩年にあり，心境の変化も著しい。初期作品群に見られる如く，彼は若い頃からローマという都市国家をめぐる諸事に深い関心をもっていた。混乱よりは秩序を，戦争よりは(一度自ら内乱の渦に巻き込まれただけに一層）平和を愛するそのこと自体は一生にわたる事実である。しかし彼の後半生に関して特に強調すべきことは，彼が国家あるいは社会という有機体の内部に占める詩人の位置，その価値，可能性，機能を確固として意識し，そしてこのことを作品に表明したことである[44]。若い頃の自我主張は稀釈され，遙かに拡大な視野において詩人の使命を根拠させるようになったと言えよう。もはや，個人的な恨みつらみを吐出するために，乙女ら少年らとの恋を回顧的に綴るために，また酒の楽しさ，星辰の美を頌えるためにのみ詩作活動の本意があるのではない，との観念を彼が抱懐したとしても，そこには何の不思議もない。詩人の立場についての認識の変化，これがあってはじめて彼はアウグストゥスの求めに応じられたのである。内部におけるこの変化をかいま見させるのが *C.* 4・15 である。この作品によって，またカルミナ第4巻を編むことによって，彼は漸く虚心坦懐にアウグストゥスの請いを容れたことを示した。

私が戦争や征服された都市のことを語ろうとしていた時，フォエブス（＝ポイボス・アポローン）がその竪琴を打ち鳴らしつつ，テュレーヌムの海に私の小さな帆を広げないようにと戒

40) J.-M. André, *Mécène*, p. 140.
41) P. Grimal, *Horace*, p. 71. J. Parret, *Horace*, p. 161.
42) P. Grimal, *Horace*, p. 57.
43) スエートーニウスの「ホラーティウス伝」で知られる.
44) *Epst.* 2・1.

めた。カエサルよ，あなたの御世は，……(*C.* 4・15・1-4)。

これが *C.* 4・15 の第一スタンザである。これまでに見た例と同様の，雄大なテーマを回避する際の型にはまった弁明である。*C.* 2・12（本文 54 頁に引用）の場合，このテーマを取らずに恋を歌えと勧めたのはムーサであったが，ここでは詩神アポローンがこれを禁じたことになっている。しかしここで彼は，「アポローンが禁じた。従って私は……」という風に，別の，抒情詩的情景を語ることをしない。この点で，この作品における回避の仕方は他の例とは大いに趣を異にする。すなわち彼は，ここでアウグストゥスの功績を列挙してその栄光を頌え，彼の力によって他の諸国に優越するイタリアの勢威を語り，そして，「先祖の方法にならって，我々は，我々の詩をリュディアの笛に合わせて，勇悍に戦った将軍たちのことを歌うであろう，トロヤを，アンキーセースを，養いの母神ウェヌスの子孫を歌うであろう」(29-32) との意志表明をもってこの詩を締め括っている。かくして，従来かたくなに避けてきた雄大な事柄を自分の詩に歌うであろうこと，すなわちアウグストゥスの要請に答えて，自分なりの方法で彼の栄光を，ウェヌスの子孫[45]の盛栄を頌えるであろうことを言明する。Fraenkel は，「ホラーティウスは，「我々は」(nos, v. 25) と言うことによって，漸くアウグストゥスを頌え，かつ彼に感謝するようになった。彼がこのように語れるようになるまでには，長い道程を歩まねばならなかったのである」として，筆者とは別の視点から，両者の触れ合いを指摘している[46]。ホラーティウスがここに表明していることは，とりわけウェルギリウスが「アエネーイス」において実現したことである。叙事詩にこそ相応しいテーマである。

45) *progeniem Veneris* とは Julii 一統のこと．アエネーアース—イウールス（＝アスカニウス）—カエサル—アウグストゥスと連なるものとされる．ウェヌスはアエネーアースの母．

46) Fraenkel, *Horace*, p. 425.

従って，我々が先に発した質問（本文57頁）に対する解答の半分が「否」であることは，ここに明らかになった。壮大テーマに対する態度が一部変化した。

とすれば，あと一半の「諾」は何に由来するか。

これも同じくカルミナ第4巻をもって判明する。ホラーティウスは主君の要望に応える意志表示をした。事実，この巻には，明確にこの線に沿って作制された詩篇が他に三つある。第4，第5，第14の3篇である。中でも第4篇と第14篇は，諸注家によって，その ἐπινίκιον としての性格が指摘される作品である[47]。そしてこれらの詩で発揮される，ピンダロスの詩風を真似て雄壮な叙事的テーマを歌うホラーティウスの技術が，Fraenkel をして，特に第4篇を，「力業」(tour de force) 的なものを含む，と評せしめるのである[48]。

C. 4・4 (Qualem ministrum fulminis alite) は，アウグストゥスの義子ドルーススが前15年，兄ティベリウス[49]との共同作戦でケルトのウィンデリキー族に対してあげた勝利を称えるために作られた祝勝歌である。同巻でピンダロス的な歌いぶりは自分の得手ではないと言いながら[50]，ここに堂々とテーバイの大詩人の詩風を彷彿せしめる点でこの *C.* 4・4 は独特である。ついでながらここには，ローマの永遠の敵ハンニバルにローマの勢栄を予言せしめる，奇抜な方法が取られており，これも一特徴である[51]。このハンニバル像は，かつてホラーティウスが

47) Steele Commager, *The Odes of Horace, A Critical Study*, 1963³, p. 230（第4について）. Page は次の如く言っている，'It（第4）is a perfect model of a Prize Ode……' (T. E. Page, Q. Horatii Flacci Carminum Libri IV, Epodon Liber, 1964, 1883¹). Fraenkel, *op. cit.*, p. 426, 431. F. Villeneuve, Horace, t. 1, *Odes et Epodes*, 1929⁷, p. 150.

48) Fraenkel, *op. cit.*, p. 426.

49) Claudius Drusus Nero は，38年オクターウィアーヌス（後にアウグストゥス）がリーウィアと結婚した直後に生まれた，リーウィアとその前夫との子．
Tiberius もリーウィアと前夫との子で，後にアウグストゥスの後を襲って皇帝．

50) *C.* 4・2・5-32.

51) *C.* 4・4・49-76.

その最期をヒロイックに歌ったおかげで実に新鮮なイメージを獲得したクレオパトラ（*C.* 1・37, Nunc est bibendum）と同様に，いつもの 'durum Hannibalem'（*C.* 2・12・2）とはうって変って，暖かみのある印象を残す。この効果は，ローマ内部からのローマ頌賛という常套手段を取らず，ローマ外部の人間に，しかも不倶戴天の敵に行なわせる手法[52]によるものである。Plessis-Lejay（この作品の序）が，比較が重なりすぎるのはまずいが，'Cette dernirère partie est ingénieuse et fière' と評したのもうなずける。

他方 *C.* 4・14 は，上述した15年の作戦でラエティー族を相手に，ティベリウスが戦い取った勝利を歌う。しかしここでは，*C.* 4・4 のドルーススの場合とは異なって，ティベリウスの占める場所はより少なく，代りにアウグストゥス本人が前面に出る。アウグストゥスに寄せるローマの感謝は尽きない。ティベリウスが宿敵ラエティーを征しえたのもアウグストゥスの軍勢あってのことである。アクティウム以来15年にわたって，彼は最も獰猛な民族や，遙かに遠方の諸国をも平定した。これがこの作品の大筋である。*C.* 4・5 もアウグストゥスを頌える歌である。彼は前16年から13年にかけてローマを離れ，スペイン，ガリア，ゲルマニアでの諸問題を調停した。平和の確立者，安寧，幸運の守護者たる彼に寄せるローマ市民の感謝をホラーティウスは歌い，市民らと共に彼の速かなるローマ帰還を願う，という主旨である。

以上，カルミナ第4巻の主要作品を概観したが，これによって，この巻の他の作品は，以上の4篇を公にするためのもっともらしい口実とするために発表された，といういささか単純化しすぎるきらいのある Page の評言が，概略正当であることが認められる[53]。我々の問題はこの巻で発揮されるピンダロス的手法である。ウェルギリウスでもなく，ホメーロスでもなく，ピンダロス。繰返すが，国威の盛大，英雄の武勲を歌うのは叙事詩の役割である。マエケーナースやアウグストゥスはこの作業をそれに相応しい詩人らに要請し，そしてそれはおおむね実現された。しかしホラーティウスの場合は彼があくまで抒情詩の枠を堅持したので事情が異なる。雄大なテーマを要求するアウグストゥスと，どこまでも些細な，柔和な事柄をテーマにしたいとする詩人とが，相互に歩み寄り，一つの妥協として第4巻に実現したのが，このピンダロスぶりではないだろうかと考えられるのである。合唱抒情詩人であったピンダロスは，神話に関する知識と，現在と過去の両世界を目まぐるしく矢の如く飛翔しうる能力を駆使して，同時代の勝利者たちの誉れを頌えることに成功したからである[54]。しかしピンダロス的とはいっても，その内実は明らかにホラーティウスのものである。彼は，絶え間なく言葉の矢を放ち，「山から奔流する川」の如く，「湧き出し，突進する，深い口をもつ」ピンダロス[55]と，自分との相違を熟知していた。

結局，アウグストゥスはホラーティウスから叙事詩を腕ぎ取ることができなかった。要請はたびたびなされたであろう。彼の友人たちや世間は，彼がアウグストゥスの業績をしかるべき詩で，特に叙事詩をもって語ることを久しく期待していた[56]。ホラーティウスは上に略述した諸篇において常套的な叙事詩の語彙，表現を利用しつつも，遂に叙事詩そのものには手を染めず，ピンダロスの詩風を模することによって，自己本来の立場を守った。

かくして，先に我々の発した質問(本文57頁)に対する解答の一半が「諾」であることはここに明らかである。彼の *recusatio* は，技巧的側面も否定できないが，やはり抒情詩人としての存在の本質に深くかかわっている。そしてこの自己認識は，彼が生命を全うするまで終熄することがなかった。

52) *C.* 3・3 におけるユーノー（女神ではあるが）の重々しい発言もこれと同様の手法といえよう.
53) T. E. Page, p. 395.
54) Kirk, *op. cit.*, 100-3.
55) *C.* 4・2・5-8.
56) Fraenkel, *op. cit.*, p. 397.

しかしこれにより，アウグストゥスの栄光が貶められたわけではない。それどころか，結局，彼の名も，詩人のうち建てた 'monumentum aere perennius/regalique situ pyramidum altius, /quod non imber edax, non Aquilo impotens/possit diruere……(*C.* 3・30・1-4)' に久遠に刻み込まれたのである。叙事詩の雄々壮大のスケールに欠ける憾みはあるにしても。

さて，我々もいささかアウグストゥスの栄光を語りすぎた。これは別の作業の主題となるであろう。ここでトロヤ戦争に戻らねばならない。本章の意図は詩人がいかに壮大なテーマを遠ざけるか，その有様を検討することであった。その目的は既に果たされた。しかし本章を閉じる前に，是非見ておかなくてはならない作品がいま一つある。これまで，このようなテーマに沿って詩作するよう勧めるのは主としてマエケーナースとアウグストゥスであることを示す作品を見たのであるが，ここに珍しいことに，アグリッパ[57]の名をもってこれがなされたことを暗示する詩篇がある。以下にその全文を訳出する。

敵を征服する勇猛なあなたのことは，マイオニアの詩の白鳥[58]であるウァリウスが記述するところとなるでしょう。そして，果敢な兵士が，船上であるいは馬を駆って，あなたの指揮下に行なったあらゆる戦闘も。

しかし私どもは，アグリッパ殿，そのような事柄を語ったり，また譲歩を知らぬペーレウスの子（＝アキレウス）の恐ろしい怒りや，狡猾なウリクセース（＝オデュッセウス）の航海やペロプスの恐るべき家のことを語る試みはしません，私どもはかぼそく，事柄は大雄です。羞恥と，平和な竪琴を司る詩女神(ムーサ)とが，傑出したカエサルとあなたの功績を，私どもの無才ゆえに，傷つけることを禁じるのです。

誰が見事に記述するでしょうか，鋼鉄の衣をまとったマルスを，あるいはトロヤの塵埃にまみれて黒いメーリオーンを，あるいはパラスに佑けられて神々と渡り合うテューデウスの息子を。

私どもは，酒宴や，乙女らが爪を短くして勇ましく若者たちに挑む闘いを歌います，私どもが恋をしていない時でも，恋に身を焼いている時でも，いつもの如く軽やかな気分で (*C.* 1・6・1-20)。

この詩から，アグリッパが直接ホラーティウスに自分の業績を語るよう要請したことが窺われる。あるいはアウグストゥスの介在が考えられるかもしれない。しかしこの推測は，アウグストゥスを中心にその左右両肩に位置するアグリッパとマエケーナースのバランスを考えると，大いに微妙である。両者は，分担する領域は異なるが，アウグストゥスがローマ世界の覇者となるのに大いに貢献した。アウグストゥスの地位が安定するにつれて，低い身分に生まれたアグリッパも目ざましい昇進を遂げる。両者間には明らかに対抗意識があった[59]。マエケーナースは，ホラーティウスによって 'Maecenas atavis edite regibus'[60] と歌われた素姓の高さおよび，他の追随を許さぬ文学界掌握とをもって，アグリッパに優越する。後者の昇進[61]を目のあたりにして彼は，アウグストゥスに，「あなたにはもはや，彼をあなたの婿殿にするか，さもなければ殺す以外に，打つ手はありませんよ」と語っている[62]。王家の血を引く 'nonchalant' な粋人マエケーナースと，忠誠，敬神，行動を旨

57) M. Vispanius Agrippa は名門の出ではないが，早くからマエケーナースと共にアウグストゥスの最も忠実な友人．軍略に秀で（陸，海ともに），アクティウムの海戦では決定的な役割を果して勝利をもたらした．以後，様々な面でアウグストゥスを補佐．

58) 「マイオニアの詩」はホメーロスの詩，すなわち叙事詩のこと．詩人は白鳥になぞらえられる (Nisbet-Hubbard, ad loc.).

59) J.-M. André, *Mécène*, p. 97.

60 「王家の血を引くマエケーナースよ」(*C.* 1・1・1). マエケーナースの母方の祖 Cilnii 家からはアレティウム（現アレッツォ）の指導者（ルクモン）が輩出した (T. Liv., 10・3・2；5・13).
Maecenas, eques Etrusco de sanguine regum (Prop. 3・9・1).

61) 自ら望んで騎士身分に留まった．もちろん彼が欲すれば更に昇進することは可能だった (Prop. 3・9・23-9).

62) Dio Cassius, LIV, 6, 5.

とするアグリッパ[63]のバランスを保つことに，アウグストゥスが些少なりとも配慮しなかったことは考えられない。ゆえに彼が詩人にアグリッパを歌えと勧めたことも考えられない。ホラーティウスは別してマエケーナースの世界の人間だったからである。マエケーナースの文学界での勢力は絶大を極めたので，たといライヴァルであるアグリッパの姿を曇らせるには至らなくとも，少なくとも，アウグストゥス時代の抒情詩，叙事詩による諸傑作によって成立するこの詩的パンテオンから，事実上彼を締め出すことができた[64]。ホラーティウスが他の詩人らと共に形成した世界は，今日の言葉でマエケーナース・サロンと称されるものであった。これとアグリッパは調和しがたい。

「ペーレウスの子の恐ろしい怒り」，「狡猾なウリクセースの航海」を歌わないとは，自分はホメーロスではないとの謂である[65]。また「ペロプス家」の恐怖とは，ペロプス—アトレウス（テュエステースの兄弟）—アガメムノーン—オレステースと続く家系が，ペロプスにかけられた呪詛に祟られて，血腥い惨劇を繰返すことを指し，この呪詛テーマが悲劇や叙事詩に取り入れられたことは周知の通りである。最後に再びホメーロスの場面に戻る[66]。

ホラーティウスの *recusatio* に関連して，Commager は 'Rejections of epic themselves become epic'（既に引用した *Epst.* 2・1・250–57 について）と簡潔に表現している[67]。この評価は最前訳出した作品に（*C.* 1・6）にもかかわる。しかしこの作品は叙事詩そのものではない。あくまでも叙事詩的要素がばらまかれているにすぎない。しかるにその方法と効果は巧妙かつ精妙である。詩人はいったん懇請者に対して，壮大を歌うことは自分の得意に非ず，むしろウァリウスにこそ相応しいと逃げを打つ。それから，苟もアグリッパが歌われるなら，しかじかの事柄が歌わるべきであると言わんばかりに，この勇将をトロヤ戦争の英雄らになぞらえ，あるいはアウグストゥスの功業と彼のそれとを併置する（laudes egregii Caesaris et tuas, v. 11）などして，結局は彼を称賛しているのである。そしてこのアグリッパ称賛に加えて，実に巧みにウァリウスをも頌える[68]。歌う力がないから歌わないと言いつつ，歌う。いわゆる *praeteritio*[69] の手法が絶妙の効果を発揮する。筆者はここに，いわば謝絶の美学の極致を見る思いがするのである。

Commager は，歌うことができないと *recusatio* を表明してから歌うホラーティウスの *praeteritio* の手法を，詩人が同一詩篇の中に対照的な二つの世界を併存させる幾つかの方法の一つであると把握して，ホラーティウスの作品にしばしば見られる矛盾の問題を明確に分析している[70]。しかし，ただ一点，上記引用の *C.* 1・6 に関して，我々の腑に落ちないことがある。それはこの詩の第4スタンザ，'Quis Martem tunica tectum adamantina/digne scripserit aut……？' という修辞疑問文の *quis* は，ホラーティウスの名をもって答えられようとしている点である[71]。確かにこれは彼の論理の流れの中では正しいかもしれないが，しかしここは明らかにウァリウスを指すものと解釈する方が順当であろう[72]。これは，上述した如く，この評者が叙事詩と叙事詩的要素とを峻別しなかったことに起因する誤解であると思われる。叙事詩的要素がカルミナ各所にふんだんにあることは，既に見た通りである。しかし，一篇の

63) J.-M. André, *Mécène*, p. 145.
64) J.-M. André, *Mécène*, p. 97 および n. 1.
65) Page (ad loc.) はホラーティウスがここでホメーロスの μῆνις (*Il.* 1・1) を *stomachus*, πολύτροπος (*Od.* 1・1) を *duplex* と訳すことによって，自分の避けようとする叙事詩体をユーモラスに軽視する意図を示したと評する (Nisbet-Hubbard も同様, ad loc.).
66) メーリオーン（またはメーリオネース）はイードメネウスの戦車の御者 (*Il.* XIII. 159). テューデウスの息子とはディオメーデースのことで，パラス・アテーナーの佑けを得て，アレースとアプロディーテーを傷つけた (*Il*, *V.* 330以下，855以下).
67) Commager, *op. cit.*, p. 114.
68) E. Plessis et P. Lejay, *Oeuvres d'Horace*, 1921⁹, p. 15, C. 1・6 の序.
69) Commager, *op. cit.*, p. 112.
70) Commager, *op. cit.*, pp. 104-20.
71) Commager. *op. cit.*, p. 114.

カルメン（carmen, 複数は carmina）が終始この要素に満たされていようとも，これを *epic* と称することはできない。あくまでもそれはカルメンである。カルミナをもって，彼は‘exegi monumentum aere perennius（私は青銅より寿命の長い記念碑をうち建てた，*C.* 3・30・1)’と誇ることができた。しかしここで，ウァリウスの名を引合いに出していながら，彼と同等に叙事詩を書くことができると言っているとすれば，この賢明なホラーティウスにしては烏滸の沙汰としなくてはなるまい。Commager が考えている程に[73]ホラーティウスが自分の力，才能を誇示したがったとは，筆者は思わない。

以上，我々は，ホラーティウスが雄壮なテーマを歌うことを回避する様子を観察してきた。その結果，これを回避する姿勢が基本的なところでは彼の生涯を通じて変らないものであること，それにもかかわらず，叙事詩的な要素が彼の抒情詩において大いに利用されていることがわかった。繰返し拒絶されることにより，かえってそれは一種の重みを得ている。読み方によっては，彼がウェルギリウスやウァリウスに伍して長大な叙事詩を書けると主張しているものと誤解されかねない程である。そして彼が好んで自作を飾る叙事詩的要素として，ローマ史に関係するものと並んで，トロヤ戦争に関するものが多いこともわかった。トロヤ戦争にまつわる神話伝説を後世に遺したのはホメーロスである。ホラーティウスはホメーロスの世界を熟知していた。だからこそトロヤ戦争にまつわる諸要素が，彼の‘mollibus modis（*C.* 2・12・3-4)’でも頻出し，詩興を高めるのである。ギリシアの抒情詩人たちとホラーティウスの関係は諸所に論じられる。ホメーロスの場合はそれが少ない。ホラーティウスはこの大叙事詩人をいかように把握していたであろうか。トロヤの英雄たちとの関連において，次章ではこの問題を考察したい。

（以下次回）

72) *quis* に対する答えは *Varius* とするのが一般的. Peerlkampf（筆者未見，Nisbet-Hubbard による）はこれを *nemo* としたが，Kiessling-Heinze (1968[13]) は「これを *Niemand* とすれば，*Maeonii carminis ales* と名ざされたウァリウスに対して配慮を欠くことになろう」と言う．Plessis-Leiay も「ホメーロスと同領域で飛翔する詩人」すなわちウァリウス．Nisbet-Hubbard は，ここで示唆される答えは恐らく *only another Homer* であろうと言うが，この *formulation* は筆者には不明．もっとも二人は「ホラーティウスは，ウァリウスが適切な候補者たりうることを如才なくほのめかしている」と続ける．この作品への注釈の序部では，二人は明確にウァリウスであるとしている．Fraenkel (*op. cit.*, p. 234) は *no ordinary poet, and certainly not I* の意であるとして，特にウァリウスを視野に入れない（Nisbet-Hubbard もこの点を指摘). Orelli も「マルス自身を，またあなたが肩を並べるあのホメーロスの名だたる英雄たちを見事な調べで歌うことは，誰にでもできることではない．しかしウァリウスならこれを立派に為し遂げるであろう (id quod tamen praestabit Varius meus)」と註釈して，ウァリウスの名をあげている (*Q. Horatius Flaccus*, Rec. atque interpret. est Io. Gaspar Orellius, Ed. Min. Tertia, curavit Io. Georgius Baiterus, Vol. Pr. Turici, 1851). 筆者の見る限りでは，これをホラーティウス自身とする可能性はどこにもない.

73) Commager, *op. cit.*, p. 114.